

Platys

[プラティス]

Special Number

KDU COMMUNICATION MAGAZINE

特別号
2025.4

広報誌タイトル
「Platys」の由来

医聖ヒポクラテスは、紀元前にギリシャのコス島のプラタナス（スズカケノキ）の木陰で弟子たちに医学・医術、医の倫理を説いたといわれ、本学にはプラタナスの木とコス島から運んだ巨石があります。プラタナスの語源はギリシャ語の「platys（広い）」であり、大きな葉や広がる枝に由来します。学生たちの豊かな成長と、九州歯科大学の繁栄を願い、「Platys」と命名しました。



口腔保存治療学分野 北村知昭教授
日本歯科保存学会 理事長 就任 記念インタビュー



公立大学法人

九州歯科大学

口腔保存治療学分野

北村 知昭 教授

日本歯科保存学会
理事長 就任
記念インタビュー



令和7年4月1日、九州歯科大学口腔機能学講座 口腔保存治療学分野 北村知昭(きたむら ちあき)教授が、特定非営利活動法人 日本歯科保存学会 理事長に就任しました。「世界で一番、歯科医学を楽しむ」をテーマに臨床・研究・教育において様々なアイデアを実践する北村教授に、学生時代の話や今後の展望についてうかがいました。これからの歯科医療を担う学生や研修医へ向けたメッセージもありますので、皆さん必読です。

Interviewer 折川紗耶花

[インタビュー全文はこちら](#) ▶

海外との連携を深め、 研究・教育・臨床に関する 学術発表のさらなる発信を目指して

今回理事長に就任された、日本歯科保存学会について教えてください。

今年で70周年を迎える歴史のある学会です。元々は「保存修復学・歯内療法学・歯周病学」というのが「歯科保存学」として1つの学問で、日本歯科保存学会として設立されました。今は学術的にも治療的にも細分化され3つの分野となっています。

日本歯科保存学会でのこれまでの活動をお聞かせください。

私が大学院生の25歳の時に所属し、学術大会での発表や、シンポジウムでの講演をしてきました。2年前に副理事長に就任し、また、認定委員会の委員長を務めました。

理事長の任期は2年間ということですが、任期についてどう思われますか？

短いとは思いますが、日本歯科保存学会のシステムとして、理事長任期の2年に加え、理事長就任の前年と退任後の翌年、それぞれ1年間、合計4年間は携わることになっています。既に昨年度は次期理事長として運営に携わってきて、理事長任期の2年間と理事長退任の翌年は前理事長として運営に関わっていくことになるので、しっかりと引継ぎもできると思っています。



今回、北村教授が理事長として選ばれた理由を、ご自身ではどう思われますか？

2017年から「日本歯科専門医機構」というのができて、この機構が認めた歯科専門医でないと厚生労働省は広告を認めないことになりました。私はその日本歯科専門医機構に2020年頃から携わっており、歯科専門医のことをよく勉強しているということが1番の理由ではないかと思います。また、2024年9月に、歯科保存専門医というものが認定されて広告が可能になりました。こちらにも携わってきたことが選んでいただいた大きな要因かもしれません。

理事長としてどのような活動を予定されていますか？

理事会の統括をすることになるでしょうし、関連学会や、歯学に関する多くの学会の上にある「日本

歯科医学会」へ出席することになります。更に、連携している海外の学術団体などにも出席したり、講演をしたりすることになるかと思います。

北村先生の経歴について教えてください。

1989年に九州歯科大学歯学部歯学科を卒業し、その後は同大学大学院歯学研究科に進みました。

大学院生の時に2年間、日本学術振興会の特別研究員になり、そのうちの1年間はアメリカのNIH(アメリカ国立衛生研究所)に留学しました。その後、九州歯科大学の口腔保存治療学分野に助手(現在の助教)として戻り、2010年から同分野の教授となり現在に至ります。



元々、歯科医師を目指していたのでしょうか？

高校時代の話になりますが、九州歯科大学を知らずに大学受験に挑んでいました。昔の共通一次試験（現在の共通テスト）の成績が思うように伸びず、どうしようか迷っていた時、隣にいた友達が九州歯科大学の願書を持っていたのです。「この大学は何？」と聞くと、「公立だよ」と言われ、学費も安いし、元々私は医者・歯医者の区別はなく、医療系に進みたいと思っていたので受験を決め、運よく合格できました。

九州歯科大学に進学した後、教授を目指したきっかけは何かあったのでしょうか？

卒業後は地元の諫早に戻って開業しようと思っておりました。ですが、大学6年生の時に部活の先輩で、且つ、私の前教授から誘われてというか騙されて（！？）当分野に残りました。大学院での研究は、

歯科医師ではない一般の基礎研究者であった生化学の教授から指導していただき、研究を叩き込まれました。厳しくもありましたが、研究の面白さも教えていただきました。のちに学術振興会の研究員に採択され、そこで折角なので海外に行ってみようかと思い留学しました。留学先のアメリカでは、まず、助教（いわゆるAssistant Professor）の職に就くことが大変難しいとされていました。アメリカの指導者に「日本の教授から、日本で就職しなさいと言われている」と伝え、「帰れ!とにかく帰ってポジションを上げろ!」と言われ、助教として日本に戻ってきました。大学に戻ってきたのは教授になりたかったから戻ってきたのではなく、行く先を決めていたわけでもありませんでした。



留学をされたとのことですが、もともと英語は得意でしたか？

いえ、読み書き程度はできましたが、会話は全くできませんでしたので、留学が決まってから数か月は英会話のレッスンに通いました。それでも留学生活当初は上手く話せず、「英語が分からないなら来るな!」と言われましたよ。日本へ帰る頃によく相手が話していることが解るようになり、「Yes」「No」で答えることができるようになりました。

留学中の生活では苦労されましたか？

留学には妻も同行し、ワシントンD.Cの近くに部屋を借りたのですが、家賃が高く、10万円程もしました。当初9月頃までは、学術振興会の給料のみで生活をしていたので、外食などは全くできませんでした。10月からはNIHからも支援をいただけるようになり、それからは少し余裕ができました。

先生は、研究と臨床を両立し研究結果を患者さんへ還元することを目的にされているとのことですが、詳しく教えてください。

具体的には、歯の根の治療をする時、最後に中を詰めますが、その詰める材料を下関市にある日本歯科薬品という会社と一緒に、7~8年かけて開発をし、2017年に製品化されました。今では、日本国内のシェア20~30%を占め、高い評価をいただいています。

すごく高いシェアですね。

他にも何か製品化されたものはありますか？

形となっているものでいうと、九州歯科大学で3年生から使う口の中全体の模型があります。この模型は、他大学では科目毎に異なる模型が必要になるため、1人で数種類の模型を使用していますが、それを1つに纏めた模型を企業と共同開発し製品化す

ることができました。

それは学生さんにとっては大切な物ですよ

そうですね、昔の学生は、私の時代もそうでしたが、科目の授業が修了した時、その科目で使用した模型を後輩に譲っていました。それが今の学生は、3年生で購入して6年生まで、場合によっては研修医までずっと持っていると思います。

先生がこの模型を造ろうと思ったきっかけは何かあるのでしょうか？

私達のような専門医は別として、一般の歯医者さんは歯根の治療そして冠を被せるまでの一連の治療を全てされているので、その経験を1度はしておいた方が良くと思ったのがきっかけになりました。



他にも今後、今はまだ出せないかもしれませんが、研究されている製品はございますか？

もちろん現在も日本歯科薬品さんとは研究を続けています。元々、私が目指していたのは「再生治療」です。私が現役の間ではなかなか厳しいかもしれませんが、「歯の神経を造る」や「歯根の先の骨を復元する」など、「再生治療」が実現できるように、今も頑張っています。

先生はその他にも、診断学で診断機器の開発もされているとお聞きしましたが…

それは率直にいうと、「していました」になります。今は同志社大学に移られましたが当時は北九州市立大学の先生や、学研都市にある早稲田大学の先生、そのような工学系の先生方と、歯根の中に入れる内視鏡を開発し特許の取得までは行いました。歯科界では決して高額ではない金額で設定し

たのですが、まだ当時の日本の歯科医療ではそこまでの需要がなかったため、販売するには至らなかったです。

先生が色々と開発することに興味があることが伝わります。今回、大学院生や研修医から寄せられたコメントの中にあつた、「“世界で一番、歯科医学を楽しむ”をテーマに臨床・研究・教育において様々なアイデアを実践されている先生」ということが分かる気がします。

やはり楽しくないとですね。楽しむということは要するに、最終的には人から「良い仕事をしている」と言われることだと思います。そうなると、必然的に楽しくなってくると思うからです。私は九州歯科大学では主に3年生を担当していますが、入学してから2年間は、解剖・細菌といった基礎医学などの基礎系を勉強し、3年生からは臨床系が始まります。講義もありますが、先ほど話した口の中の模型を使つての

実習があります。学生の皆さんは歯医者の学校と思って入学してきていますから、興味が出てきますよね。そこで、私が担当する科目では、講義より実習を先に行っています。まずは解らないなりに手を動かして触ってもらい、その後に理屈や理論を講義で勉強するようにしています。

他の大学とは違うのでしょうか？

他の大学もそうですし、九州歯科大学でも他の科目では実習ではなく講義が先だと思います。通常の流れからすると、理屈が解っていないと手は動かさないという発想でしょうが、折角、歯医者になりたいから来ているのだから色々触ってみたいと思っているはずです。私の科目の実習書は頁数が多く



結構分厚いですが、シナリオ形式にしているので実習書を見れば解るようになっています。〇〇さんという患者さんが来てから、実習書通りに進めていく治療をすることになります。講義では、既に模型などで触っているので、「この前やった実習はこういうことだよ」「ここで使った材料はこういうことだよ」と伝えたと、目に浮かび易いのでは、と思っています。

研究者の先生方にはどのような方針で指導されていますか？

大学院の間は、実験は大学院生が行いますが、論文の書き方についてはノウハウを知らないので指導者が書いています。少しは学生に書かせてみますが、学術論文の書き方や英文の使い方などが解らないので指導をします。海外の有名な雑誌などに掲載する時は、提出した後に論文の審査をする人がいて、文言が正しいか、足りていない箇所がないか、掲載しても良い論文かなどチェックされます。内容が良く

ないとReject、つまり、掲載を拒否されます。それを経て掲載できることになりましたが、私が大学院3年生で初めて論文を投稿する時、そういうことを全く解らずにいたので、生化学の教授に



「自分で勝負させてほしい」と言ったところ、教授から「それは助教になってからしなさい」と言われました。今、考えれば当然のことでした。大学に戻って助教になってから、自分でトライしました。最近の若い人達は、論文は指導者が書いてくれるものだと思っています。もちろん指導はしますが、失敗を怖がらずチャレンジしてほしいですね。

他にはどのような指導をされていますか？

世の中には技術的に上手な歯科医師がいます。開業医の先生方の中にも学会の中にも、福岡県内にも北九州市内にもいます。大学院生も含め若手の歯科医師の中には、一足飛びにそこを目指し、0からスタートしていきなり100になろうとする人が結構います。しかしそれは当然無理なので、一步一步できることを増やしていくことが必要です。今この時点で勉強したことを1年後に繰り返して勉強してみると、1年前では気付かなかったことが多くでてくるはず。同じことを繰り返し勉強することが必要だと伝えたいです。あと1つ、指導者に対して質問をすることですね。質問をすれば怒られると思っている人が多いよ



うに感じます。教科書に載っていることであれば、教科書を見なさいと言われるでしょうが、それも質問をしないと分からないので、まずは色々な質問をするように指導しています。

質問をして、教科書と違う答えを先生から教えていただくことができるかもしれませんね。

学部生の時であれば理想的な答えは教科書になるので、正しく理解できているかということになります。大学院生あるいは歯科医師になれば、その指導をする先生が悩むような質問や、答えが無い質問・いくつかの考え方があある質問、いわゆる「Good Question」ができるようになるかですね。そうすると、ステップアップというか、次に自分が何をしないといけないのか見えてくると思います。あとは、指導する先生を追い越せないと思わないことです。いつかはこの人を追い抜いてやる!と思うことです。私もそう思い続けてきました。



日本歯科保存学会 理事長として、一般の方へのメッセージをお願いします。

一般の方々は、歯が痛くなったら歯医者に行く、歯の痛みが無くなり治療が終われば行かないと思います。ところが先ほど話をしたように、歯科保存専門医の専門性の一つに「虫歯の管理(マネージメント)」というのがあります。虫歯がまだ浅い時は、歯を削りません。削ることなく専用のフッ素を塗布したり、ブラッシングの仕方を教えたりすることができます。我々が患者さんのところに行くことはできないですが、来ていただければ削らずに済むという状況が長く続くわけです。歯を削ってしまうと場合によってはまた虫歯が悪化してしまいます。早期対策することで、皆さんが一番嫌な歯の根の治療をせずに済むかもしれません。



それでは最後になりますが、理事長として意気込みをお願いします。

これまでも日本歯科保存学会では取り組んできたことですが、研究・教育・臨床に関する学術について先生方が発表する機会をさらに増やし、今以上に盛り上げていきたいと思っています。また連携している海外の学術団体との交流を活発にしたいと考えています。加えて、昨年認定された歯科保存専門医について、着実に運用していくことに注力します。認定されましたが運用をしっかりとしていかなければ取り消されるということもありますので、安定させて運用していくことが大切になります。



インタビューを終えて

今回のインタビューで見えてきたのは、患者さんの治療に、後進の育成に、そして歯科医療の発展に、どんな場面にも全力で向き合う姿でした。自分に厳しくも、常に楽しむ姿勢とチャレンジ精神を忘れずに、おかれた環境でベストを尽くしてきた北村教授。今後は、日本歯科保存学会の理事長として、歯科保存学分野ならびに歯科医療業界全体を牽引していくことになり、業界は益々発展することになるでしょう。



Profile



北村 知昭

(きたむら ちあき)

【生年月日】1964年7月1日(60歳)

【職位】九州歯科大学

口腔保存治療学分野 教授

【経歴】

- 1983年 九州歯科大学 入学
- 1989年 九州歯科大学 卒業
九州歯科大学 大学院 歯学研究科 入学
- 1992年 日本学術振興会 特別研究員
- 1993年 九州歯科大学大学院歯学研究科 修了 博士(歯学)
(歯博甲第290号)
アメリカ合衆国NIH留学
- 1994年 九州歯科大学 歯科保存学第1講座 助手
- 2010年 九州歯科大学 口腔保存治療学分野 教授
- 2012年 九州歯科大学 歯学科長(2年間)
- 2016年 九州歯科大学大学院 歯学研究科長(2年間)
- 2018年 九州歯科大学附属病院 副病院長(4年間)
- 2019年 日本歯科保存学会 副理事長(4年間)
- 2023年 歯科保存専門医認定委員会 委員長
- 2025年 日本歯科保存学会 理事長

【認定医・指導医】

日本歯科専門医機構認定 歯科保存専門医(指導医)

【所属学会】

日本歯科保存学会, 日本歯内療法学会,
IADR, JADR, 九州歯科学会,
日本再生医療学会, 他



折川 沙耶花

(おりかわ さやか)

福岡市のグローバル・エンターテインメント企業“SYNAPSE”在籍。現役のモデルとしての活動だけではなく、官公庁行政、政治経済、医学学会など各種式典イベントのMCをはじめ、TVアナウンサーやラジオパーソナリティ、リポーターなど、幅広く活躍するマルチタレント。

【実績】

- ・グリーンチャンネルTV
- ・JRA 日本中央競馬 全レース パドック進行中継キャスター
- ・FMラジオ パーソナリティレギュラー
- ・日本赤十字血液センターCMナレーション
- ・製薬会社ナレーション
- ・内閣府主催シンポジウム
- ・国税庁セミナー司会
- ・経済産業局 セミナー司会
- ・マラソン実況中継リポーター
- ・福岡アジア文学賞フォーラム司会
- ・ラグビーワールドカップ2019プロモーションイベントMC

◇その他

(行政・政治経済関連・医学学会・式典・イベントMC/司会)多数

【資格】

- ・メディカルドクタークラーク
(医師事務作業補助者/認定医師秘書)
- ・ミュージックスクール MC講師
- ・芸能事務所 MC講師